

## 英語活動によるエコ学習

荒尾 浩子\*

小学校教育における総合的な学習の柱の一つである「国際理解」の枠組みの中で、英語活動が全国的に実施されるようになって久しい。平成23年度施行の新学習指導要領では、英語活動が、高学年において、総合的な学習の時間とは別に、年間35時間の必修化が義務づけられた。三重大学英語教育コースでは、2年生の学生が、平成16年度から平成19年度まで過去4回、北立誠小学校の児童を三重大学に招き、フレンドシップ事業として英語活動を実施してきた。本稿では4回目となる平成19年度の実践報告をする。過去3回の実施における反省点を踏まえ、初の試みとなる高学年対象（5年生）の英語活動を実施した。課題としては、5年生の子どもの発達レベルを念頭に、単なる楽しい活動ではなく、知的好奇心をくすぐり、英語を通して確実に何かを学ばせることであった。テーマはEcologyと設定し、学生なりの方法で、英語を通して身近なEcologyへの意識を高める活動を実施した。

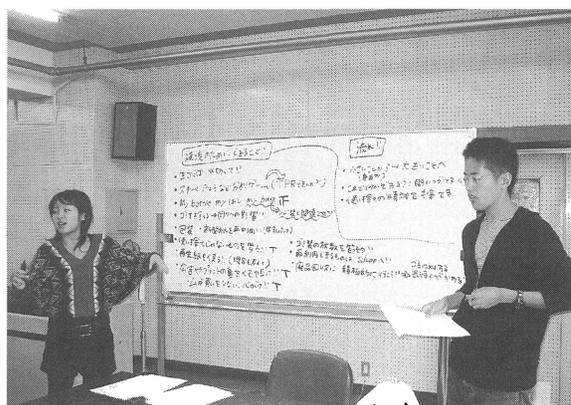
キーワード：フレンドシップ事業、英語活動、地域連携

### はじめに

英語教育コースの学生が行うフレンドシップ事業の目的は、①自分達の専門を通しての地域貢献 ②地域の児童と親交を深め子供との接し方などを学ぶ ③活動内容を計画、準備する過程で活動の組み立て方、実施方法などを学ぶ、といったことが挙げられる。これまで過年度3回の取り組みは、それぞれの期生の個性を尊重し、固定概念にとらわれない学生らしい英語活動を実施してきた。毎回、参加した児童、小学校の先生方からも好意的な評価を受け、実施した学生も大なる満足感を得ることができ、成功を修めてきたと言える。しかしながら反省会や振り返りのレポートの中で、「どれだけ学びがあったのか」ということが課題の中で残されていた。英語活動の楽しさを伝えることは、もちろん重要であるが、そこに新たな発見、学びがあることが望ましい。そこで平成19年度は、高学年の5年生が対象となったこともあり、単なる楽しいだけの活動に終わらせないということ为前提とし、英語活動案を練ることから始まった。学内でもエコバッグが全学生に配布されるなど、タイミング的に、学生達のエコロジーへの意識も高まっていたこともあり、テーマはすぐエコ学習に定まった。さて問題は、このエコ学習と英語活動をいかに結びつけるかである。エコ学習に必要な用語と英語活動で子どもが普段から馴染みのある英語とは、大なるギャップがある。またエコ学習といっても範囲は広く、どこに焦点をあてるかということが最初の議論的となった。

子ども達の英語のレベルについては、実施学生らは、別の授業（英語科教育特講Ⅰ）で3回にわたり、小学校

で担任の先生が実施する英語活動にゲストとして参加しているため、大まかに把握できていた。エコ学習の内容としては、児童は環境学習をすでに経験している程度知識があること、また身近な問題を取り上げることが、英語の理解の助けとなることを意識し、まずは自分達がエコを取り上げる上で、思いつくことをブレインストーミング方式にあげていくことから計画の第一歩を始め、ゴミ問題を取り上げることになった。



### 1. 活動

#### 1.1 Introduction

学生全員が児童の前に立ち、英語で自己紹介を行った。

学生：Hello, everyone. My name is \_\_\_\_\_.

Please call me, ○○.

児童：Hello, ○○!

気持ちを高めて元気に、活動をスタートすべき大事なパートである。同時に学生にとっては、やや緊張を伴うところであり、児童にとっては、英語を聞き、発するウォームアップである。児童に今日の英語活動の主要テーマが

\* 三重大学教育学部英語教育コース

何であり、それが英語で展開されていくということを最初に把握させる。

学生：Today, we'll learn Ecology in English. Do you know Ecology? What is Ecology?

児童からは、「環境?」「エコや」と小さな声があがる。すかさず、学生はその声を拾い上げ、環境保護のことを英語でやっていくのだと日本語で伝える。

### 1.2 A Song in skit

活動全体の流れがスキットによって、展開される。メインの登場人物である3人は児童と同じ小学生、Hanako、Yoshio、Taro である。学生3人がこの役を演じる。

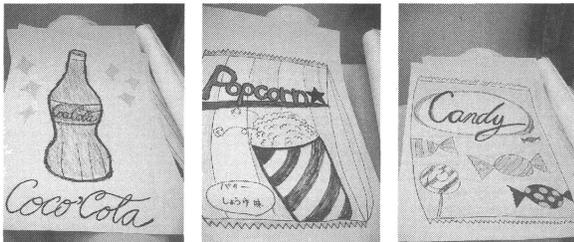
Hanako: Hi. I'm Hanako. I'm very tired. I'm very hungry.

Let's go to the convenience store.

これから食べ物を買うため、コンビニに行くという設定である。"Hiho"の替え歌を用いて買い出し行く歌を歌う。

- ①絵カードを見せて語の説明
- ②語の発音モデルとリピート
- ③大学生の歌の見本
- ④一緒に歌う
- ⑤大きい声で歌えるまで繰り返す

絵カードは、coke、popcorn、candies である。日本語でもカタカナ音で馴染みのある語である。Popcorn は、カタカナ発音と英語発音のギャップが一番大きい語である。学生のモデルをきちんと模倣させ発音させる。



#### 替え歌の歌詞

Let's go, Let's go Let's go shopping  
I wanna buy (a coke)(popcorn)(candies)  
Let's go, Let's go  
Let's eat, Let's eat Let's eat popcorn. (candies)  
I'll open a pack of popcorn (candies)  
Right now, Right now

児童達の様子は、エレキギターの伴奏と学生の歌の見本に、喜んでいというより、どちらかという后感心して聞いているという様子であった。自分達と一緒に歌う場面では、初めは、声が小さく手拍子はするものの、のりきれないところがあった。しかし学生の促しで何度も繰り返すうち、児童の声もしだいに大きくなり、リズムカルに歌えるようになった。特に女子よりは男子児童の

ほうが笑顔でリズムに乗ってよく歌えていた。この様子から、高学年の英語活動でよく現場の先生から耳にする難しさを目の当たりにした。歌は、英語活動の三種の神器の一つなどと言われもするが、高学年の自意識が高まる発達過程の児童は、指導者側が期待するように、皆が皆、大きな声で楽しみに参加できるわけではないということを改めて認識した。

### 1.3 The importance of *Bunbetsu*

ゴミの分別とリサイクルを英語とゲームで学ぶ。最初にYoshioに扮した学生がゴミに関するマメ知識を紹介する。

Yoshio: I know much about Ecology. I'll tell you some.

This plastic bottle is great. We can make this clothes from plastic bottles. (ペットボトルと洋服の絵を見せる) Do you know that a bottle is very strong? How old are you? (今度は瓶の絵を見せる)

問いかけられ児童の何人かが "I'm eleven." と答える。それを受けて学生はさらに、いかに瓶の強度が高いか説明する。

Yoshio: My friends and I are twelve years old. Eighty years later, (12+80=?と書いた紙を見せながら) how old are we? Anyone?

児童は素早く "ninety two" と答えた。5年生にとっては簡単な計算だが、答えをすぐに英語で言えるのは、5年生レベルではかなり高いと言えよう。

Yoshio: Right. Very good. Eighty years later, we'll become 92 years old. Hanako will be a grandmother and we will be grandfathers.

(そして同時にお年寄りになったTaroやHanakoのイラストを見せる。)

Yoshio: Eighty years later, a bottle is still new. A million years later, the bottle is still new.

(ぴかぴかに輝く瓶の絵を見せる)

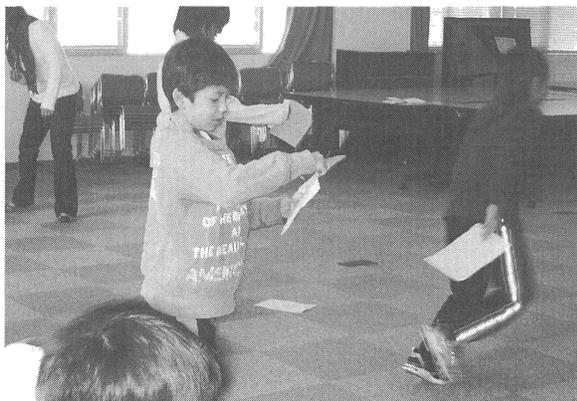
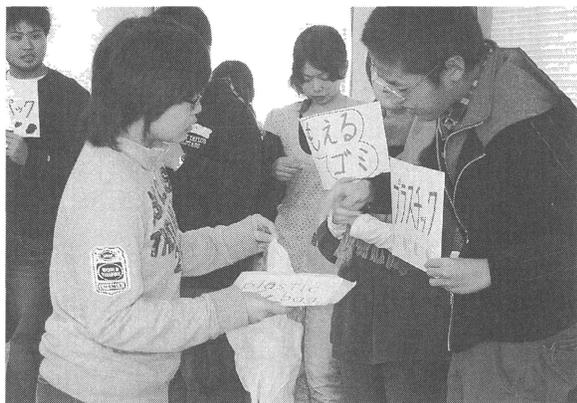
次に、自動販売機のイラストを見せ、缶コーヒーを手にしてみせる。

Yoshio: This is a vending machine. Vending machine is *Jidouhanbaiki*. You can buy drinks from this. Do you know how much this is? (児童の120円という声を拾って) Yes, this is 120 yen. (コーヒーをグラスにつきながら) But the coffee is 15 yen and the can is 20 yen. So the can is very expensive.

ペットボトルや瓶、缶のリサイクルの意義をここから学ばせる。次のシーンではTaroが適当にごみを捨てようとするところにHanakoが止めに入り、紙類、ペットボトル、プラスチックを分別するようにと注意するやりとりをスキットで見せる。そしてここからゲームを開始する。



can、bottle、plastic bottle、plastic bag、paper、cartoonの単語と実物を見せながらリピートさせる。次にチームに別れ、列を作らせる。先ほどの単語のカードを学生が一人ずつもち、会場の端に立つ。児童のチーム代表が、“Ready go”の合図で走り床に置いてあるカードを拾って見、その実物を取りに行き、それをもって大学生のところに行く。そして“This is a plastic bottle”. と英語で学生に伝える。正解すれば“Right”と言われ、シールがもらえる。“Wrong”と言われたら、戻って、仲間に助けを求め、正解するまでトライする。単語と物を認識して一致させることと、正しく発音して言えることが大事である。見本をみせる際、学生がわざと間違え児童の助けを求めるなどして、やり取りを増やし、児童の正解したいという意欲を高めた。



#### 1.4 Eco bag chants

ここでは、エコバッグを持参しようということを奨励するチャンツを行った。まずはその必要性を解説した。大学生がエコバッグを手に、これが何かと児童らに問いかける。「エコバッグ」と、口々に言う児童に対して、“Yes, this is an eco bag.”とカタカナ発音（エコ）にならないように英語らしい発音 / i:kou / で返す。ここからは、ゴミ問題とエコバッグの関連性についての解説である。  
①家庭ゴミの60%がレジ袋である。②一人の人が一日、一枚のレジ袋を使用している。③日本ではレジ袋税は5円だがアイルランドでは20円である。④ドイツ、台湾、韓国ではレジ袋は使用しない。これらを英語で伝え、分かったかを確認し、分からない場合は日本語をはさみ、何度も英語も繰り返す。そしてこれらの解説から（我々もエコバッグを持つしかない!）という認識を持たせる。ここからがチャンツの導入である。

A: Do you have an eco bag? Do you know an eco bag?

B: I don't have it. I don't know it.

A: You have an eco bag, O.K.!

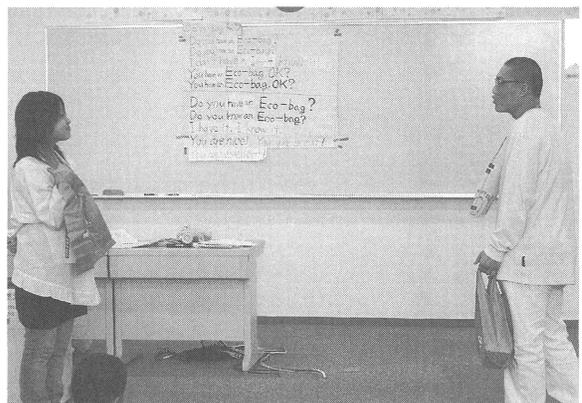
You have an eco bag, O.K.!

A: Do you have an eco bag? Do you know an eco bag?

B: I have it. I know it.

A: You are nice, you are great, you are excellent.

このA、Bのやり取りをキーボードのリズムと手拍子に合わせて行った。男女、AとBに分かれて、役を替えながら、全体で何度も繰り返した。オリジナルのチャンツを作ったのだが、うまくリズムに言葉をのせることができた。日本語の解説を交えることで英語の理解も深まり、リズムカルにフレーズが言えるようになった。



#### 1.5 Clean up chants

物を大切にして、再利用を心がけることでゴミを減らそうという主旨のチャンツである。お母さんとTaroのやり取りから、物を捨てずに使う重要性を伝える。場所はTaroの部屋という設定である。

Mom: Clean up, Clean up Let's clean up my house. I throw this. I throw that.

Taro: Don't throw away. Don't throw away. I can use it for writing. I can use it as a case.

掃除をしながら紙や箱類を捨てるジェスチャーとそれらを書いたり、入れたりする物に使えるというジェスチャーをしながら、スキットで、見本を見せ、男女別れてお母さん役と Taro 役で児童にもやらせる。分かり易くするために、途中で「捨てちゃダメだよ。まだ使えるよ」などと日本語を挟み、児童の理解を深めた。

### 1.6 How is today's lesson?

英語活動で通常行っているように、振り返りを行う。学生からは、“I had a very good time.” “I enjoyed today's activity.” “You are excellent.” といった、感想を告げた。その後、一列に並ばせ、エコバッグのお土産を学生から児童に一人ずつ手渡し、今回の英語活動は、すべて終了した。児童は笑顔で学生全員と握手を交わしながら、会場を後にした。



## 終わりに

今回の英語活動は、過去3回のものと比較し、内容的にかなり学習の要素が濃いものであり、英語を通して何かを学ぶことを意図したものであった。そのため児童が盛り上がるゲーム感覚の活動は少なかったが、エコを楽しく、しかも英語で学ぶよい機会となった。英語では eco をエコとそのままカタカナ発音しないこと、またいわゆるビニールのレジ袋を plastic bag と言ったり、ペットボトルを plastic bottle と言ったりするのは、児童にとってこの活動を通しての新発見であった。また単に、「ゴミを分別しよう」「エコバッグを使おう」と呼びかけただけでなく分かり易く数字や絵を示して事実を伝え、しかも英語で理解できたことは、5年生の知的欲求を十分に満たすものであった。実施した側の学生としては、活動直後は、自分達の活動が果たしてどの程度、評価されるものであるのか、自信が持てないところがあった。しかし後の報告で児童らが大変な充実感を得、また小学校の先生に感心していただいたことがわかり、高い満足感と達成感を得ることができた。また翌年度の春には、北立誠小学校の先生のリクエストで、小学校に出向き4年生の児童に同じ内容の活動を実施した。(自分達のあの活動でよいのか)と半信半疑ながらも、このような要請があることは、大変な光栄であり学生達のさらなる自信になったと思われる。思春期にさしかかる高学年の英語活動には、先述のような難しさは、確かにあるであろう。しかし英語活動は必ずしも児童が天真爛漫にのってくる楽しさを追求したものでなくてもよい。無理に活発な活動に引き込むことより、静的内容を取り入れ、学びを中心とし取り組ませることで、英語活動を苦痛にしないよう考慮することも今後の高学年における必修化に向けて重要な課題である。